

表出能力を伸ばす漢字語彙学習の実践

Kanji Vocabulary Learning which Enhances the Ability of Expression

徳弘 康代 (早稲田大学)

Tokuhiro Yasuyo(Waseda University)

要 旨

漢字教育は漢字一字の学習にとどまらず、漢字を含む語とその文脈での適切な使用までが教育の達成目標となる。中上級レベルの漢字語彙学習においては大量の語彙の中から必要な語彙を選択することが重要であるが、必要な漢字語彙は各自で違いのあるものである。本実践研究では、大学・大学院生が各自の専門分野に必要な語彙を選択し、まとめて概念地図を作成し、それを用いて表現する学習活動を行い、その実践の報告と考察を行う。

The aim of kanji education is not only studying a particular kanji character but studying kanji combinations. Using these combinations appropriately in context is also a significant goal. Learning kanji vocabulary in intermediate and advanced levels, it is important for students to select the most useful words from the large amount of existing vocabulary. However, the value of each particular kanji vocabulary differs for each learner. In this practical research, university and postgraduate students collected vocabulary pertinent to their particular field. Then students made conceptual maps by using those collected words. By using those maps, students created compositions utilizing expressions of their specialized fields. This paper is a report and examination of those activities.

【キーワード】 漢字教育・概念地図・漢字語彙習得・中上級漢字学習

1. はじめに

漢字で使用頻度が高く、その漢字を含む語の数も多いものは、そのほとんどが初級で導入される。しかし、初級で学習する語彙は限られている。頻度の高い漢字の語数の多さと各語の重要度を考慮すると、初級でその漢字を教えるだけでは不十分であることが分かる。漢字学習における初級と中上級にあるギャップを埋めるには習得漢字数だけではなく既習漢字を含む語の量を増やさなければならない。

その語彙の導入については二つの方向から学習を進める必要がある。一つは、漢字の頻度と、その漢字を含む語の数に着目し、応用性の高い漢字とその語彙を優先的に導入することで学習者の抽象的思考を伸ばす情報提供型の教育である。もう一つは学習者が自ら語彙を選択し、それらを表出することで語彙を習得する方法である。本稿では、この二つの方向の学習のうち、特に学習者が自ら語彙を選択し習得する学習として、各自の専門分野に必要な語彙をまとめた概念地図を作成し、それを用いて表現する学習活動を提案し、その実践の報告と考察を行う。

2. 情報提供型と学習者選択型の漢字教育

中上級の漢字学習者から、一体どのくらい漢字を覚えればいいのか、という嘆きと、自分に必要なものを覚えたい、という声がよく聞かれる。それらの声に応えるために、中上級の漢字学習を仮に情報提供型と学習者選択型の二つに大別してみる。情報提供型の教育とは、つまり、一体漢字はいくつ覚えればいいのか、漢字語彙はどのくらいあるのか、という声に応えるものである。この方法に関しては、徳弘(2005a)において、漢字2,100字について情報を提供する学習資料を開発し、漢字を含む語彙については、その頻度と親密度を考慮した約15,000語の語彙選択を行った(徳弘2005b)。本研究ではこれらの選択語彙を参考にしながら、学習者がそれぞれのニーズに合わせて、自分に必要なものを覚える学習者選択型の漢字教育を実践するために、概念地図を用いた学習を試みた。

3. 概念地図について

概念地図は、言葉によって、ある範囲の概念の広がりや図に示したもので、ニューラルネットワークの相互結合型モデル(Elman et al. 1996, 中野 1979 など)のアイデアをもとにして作成したものである(徳弘 2003)。相互結合型モデルはCollins & Loftus(1975)の活性化拡散モデルとも共通する形で、相互に結びついたネットワークである。この形はさらに遡れば、19世紀から研究の始まっている連想法とも通ずるものである。国語学では林大(1957)の「星図になぞらえた語彙表」も同様の形を持つものである。概念地図による連想法を学校教育に用いた学習例として安西(1993)がある。

4. 概念地図を用いた学習

本実践研究では、早稲田大学の「漢字7・8」(上級レベル)の3クラス(学生数各約30名)において実施した概念地図を用いた学習について、その実践報告と考察を行う。学習は2回に分けて行った。1回の時間は約1時間で、内容は次のとおりである。以下この順に従って述べていく。

第1回

- (1) 自然に関する言葉の地図を作る
- (2) 自然に関する言葉の概念地図(指導側作成)の配布と学習
- (3) 概念地図の語をもとに作文

第2回

- (4) 学習者の専門分野に関する語彙で概念地図を作成する

5. 学習実践報告および考察

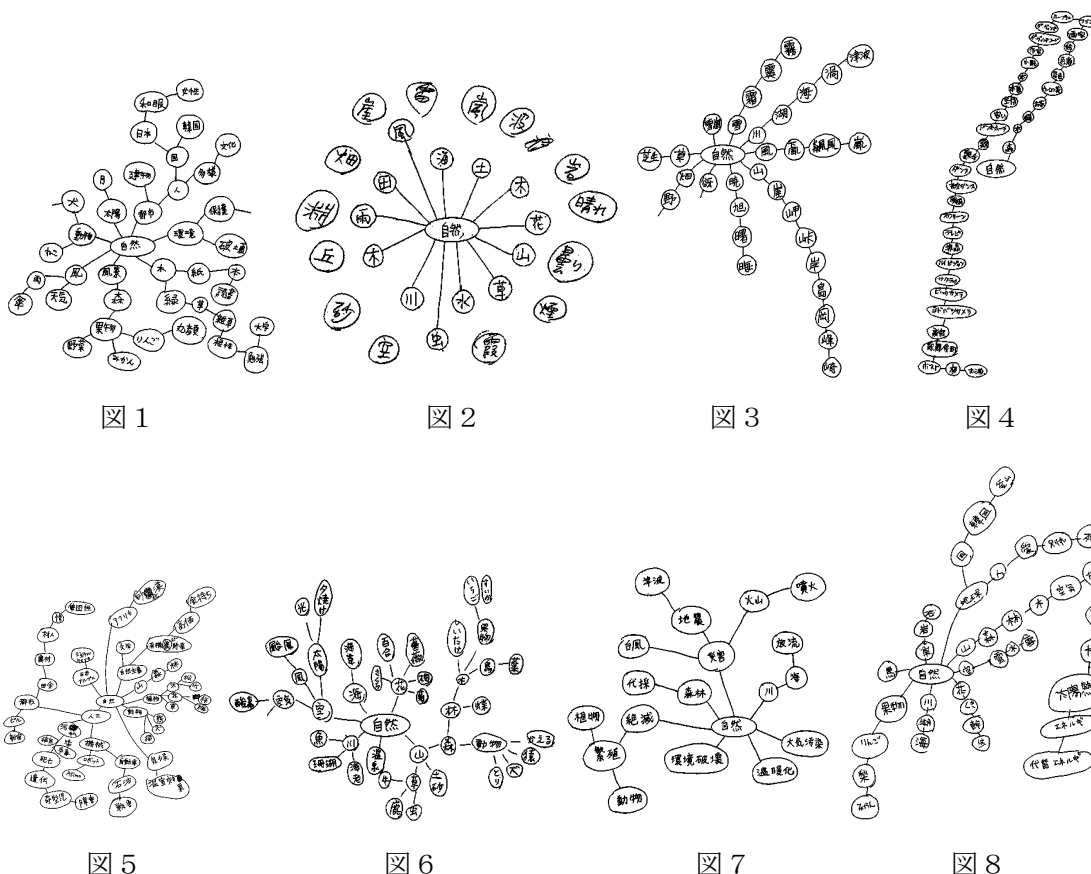
(1) 自然に関する言葉の地図を作る

まず、第1回のはじめに、約15分で自然に関する言葉の地図を作成させた。A4用紙1枚の中心に「自然」という語を置いて、その語から連想する語を書き、語を○で囲み、語と語を線でつなぐ作業を行った。作成時は辞書を引くことも学習者同士で話し合うことも可とした。この学習の意図は、ある概念で言葉をまとめることによって、自分の記憶にある言葉と脳内の概念の広がりを結びつけ、さらに概念や母語では分かるが、日本語では言

えない言葉や表現を自ら学ぶところにある。この作業によって記憶の精緻化が行われることも期待される。学習者の作成例を図1～8に示す。

学習者の作成した図には、いくつかの類型が見られた。図1, 2のように分散していくもの, 図3, 4のように直列に進んでいくもの, 図5, 6のように分散した先でさらに分散するクラスター型, さらにその複合などである。これは、各自の思考方法を示しているように思われ興味深い。つまり、思考が並列分散的に行われるタイプと、直列で一方向に進んでいくタイプである。これはよし悪しではなく、各自の思考法の個性とも言えるものであろう。また、この図を作成する際、自然という語を中心に置いたが、分散型の図は、その中心から、図7のように左方向に展開するもの、図8のように右方向に偏って展開するもの、全体に分散するものに分けることができた。

<自然に関する言葉の概念地図, 学習者の作成例>

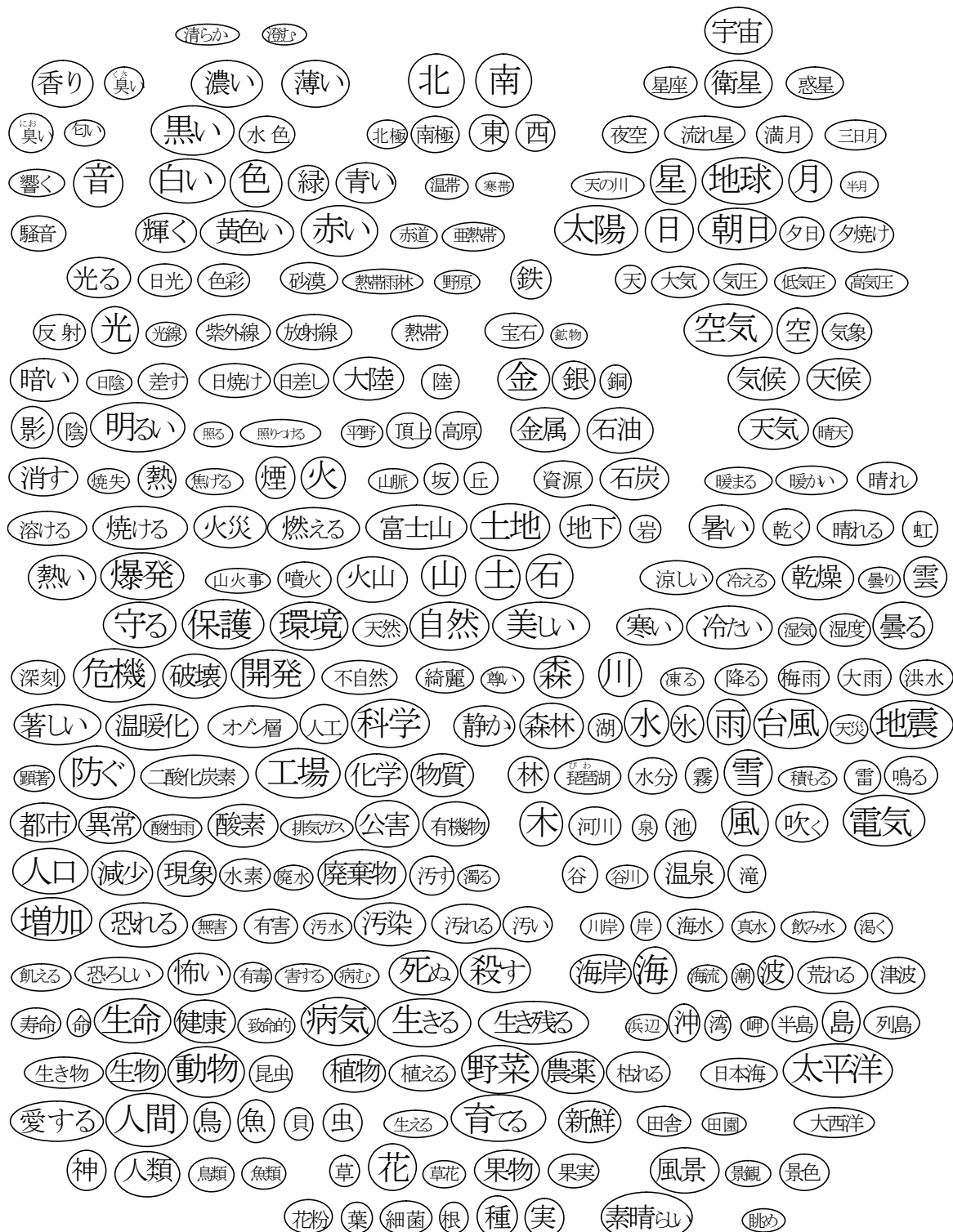


(2) 自然に関する言葉の概念地図 (指導側作成) の配布と学習

(1) で学習者に自然に関する言葉の地図を作らせた後で、こちらで作成した自然に関する言葉(約300語)の概念地図(図9～11)を配布した。これは『分類語彙表』(1964)の自然に関するものを主にして『分類語彙表』の番号の近い単語を選び出し、相互結合型のネットワークにしたものである。一つ一つの語を独立させるために○で囲った。字の大きさは頻度と親密度(天野他1999・2000)の高いものを大きい文字で示してあり、字の大小によってその語の重要度が判断できる。概念地図の提示は、学習者が連想で

語彙を増やすことだけでなく、教師側から有用な語彙を提供することも重要な目的となっている。語彙の情報はリストにして示しただけでは、学習者の連想のネットワークは十分に広がっていかないが、それを地図にすれば、その概念地図上を目でたどることによって脳裏に何らかのイメージが広がりやすくなる。地図上で学習者が自らのスキーマを自在に動かしていけるようにすることが、語彙を地図の形にした理由である。(1)の図の作成によって学習者に概念の広がりを喚起させておいて、そこに日本語の語彙を習得すれば、ある概念体系に組み込んだ形で語彙が習得でき、それは後でその語を利用する時にも、記憶から取り出しやすいものになると考える。概念地図は同じ形の図を平仮名と英語で作り(図10, 11)、三枚重ねて提示した。学習者には、一通りこの地図を見て、知らない語で自分に必要と思われるものは覚えるように指示した。

<自然に関する言葉>



© Yasuyo Tokuhira 2006

図9 自然に関する言葉の概念地図 (漢字)

<自然に関する言葉>

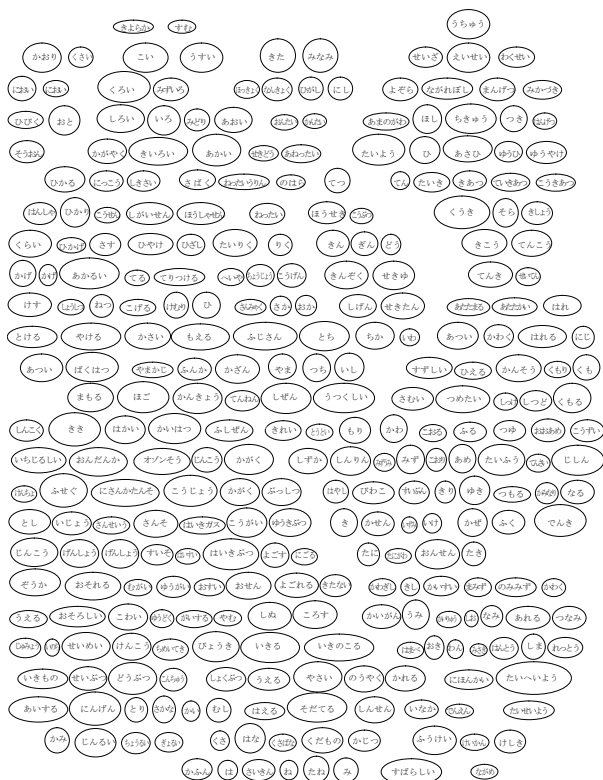


図10 自然に関する言葉の地図 (ひらがな)

<自然に関する言葉>

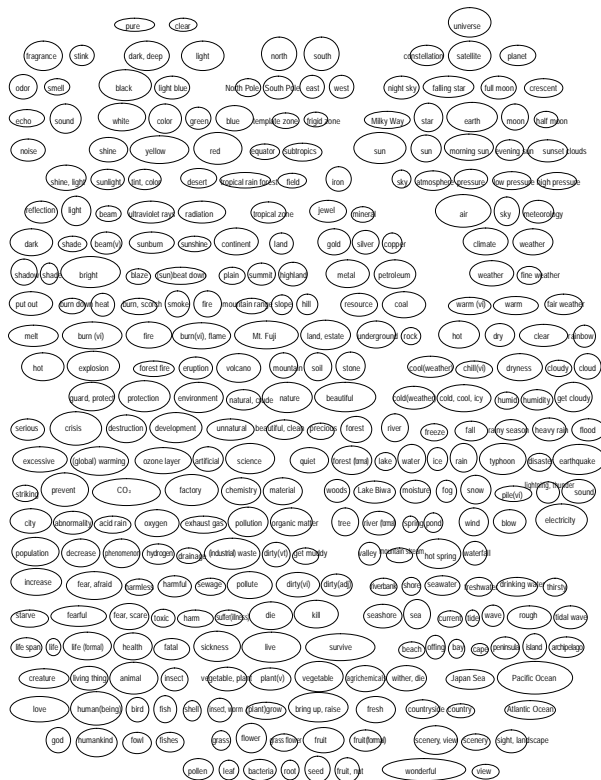


図11 自然に関する言葉の地図 (英語)

(3) 概念地図の語をもとに作文

次に概念地図の語をもとに作文をさせた。作文については、4人1組のグループで行われた。全部で400字の文章を4段落に分けて1人1段落(100字)を担当し、話し合っ一つの文章を作り上げることとした。グループで作文させた理由は、グループで行うことによって文章構成をはっきりと意識させて作文することができることと、作成の過程で話し合いが必要になり、そこでも新たな語を学び、それを使う機会が期待できるからである。グループには課題として、自然に関することで、話し合っ自由にテーマを決め、構成を考えて分担を決め、各自書き終えたところで読み合わせて、重複がないか、文章のつながりはよいかを確かめるように指示した。次に学習者の作成した「自然と神」についての作文例を示す。漢字・文法の誤りを訂正する前のものである。

神というものは、本当は存在していないのではないか。例え存在しないと言っても遥か昔から世界の各地では様々な神話がなぜか言い伝えられている。植物は太陽の光を浴びて成長する。多いの人間は花の匂いに心を打たれる。自然はありとあらゆる人間に神の印象を与えて来ただろう。

この様に、川の水に反射していた光に金を見た人が多いだろう。本当に金であれば、ただ光の反射であれば、多いの人々はその色に魅了されて来た。金色の物に神を見た人も多いだろう。その結果、文明と共に日や金に基づいた宗教が沢山現れた。

嵐や竜巻などの恐ろしい自然現象に神の存在を感じた者も沢山いただろう。文明社会の中でも恐怖が高まる時、多いの人々は神や神を知り尽くしているように思われる宗教に救いを求める。時代によって、人間にとって災い自然現象が神に与えられた罰だという見方もあった。

一方、仏教の神は恐ろしくない。更に、文明の前進と時代の変化と共に、人間の信仰は自然の神を崇拝する宗教から、神の存在を得た人間を崇拝することへ移り変わっている傾向が見える。このことから、人間が自然と離れつつあるという考えも想像に難くない。

以上、(1)～(3)の作業を1時間で行い、第1回の学習とした。

(4) 学習者の専門分野に関する語彙で概念地図を作成する

第1回の学習の終了時に、2週間後に自分の専門分野で概念地図を作ることを予告し、2週間の間に言葉集めをしておくように指示する。1週間後には、言葉集めの進捗状況を報告させるにとどめて、準備期間とする。2週間後に1時間を使って自分の専門分野に関する概念地図を作成した。学習者による作成例を<学習者の作成した各専門分野の概念地図>に示した。学習者によってはコンピュータを用いて地図を作成した者もあった。

学習後にアンケートを行い、この学習活動について「よかったこと」と「よくなかったこと」を書かせた。学習者(82名)の感想を類似したもので項目にまとめ、その回答者の人数と回答内容の一部を下の表にした。

項目	人数	回答内容(一部)
語彙が増えた	18	専門領域の言葉を増やせてよかった。
理解・知識増	14	連想しながら、ぼんやりしている意味の言葉が正確にわかるきっかけになった。 一つの分野について知識が増えます。/もっと理解を深めた。
既知語の整理	9	単語を一括整理する機会になってよかった。/自分が勉強したことを思い出すことができてよかった。
気づき	7	意外と分からない単語が多いということに気がついた。 専攻がない私には自分が今この学校で何をしているのかについて悩む時間になったような気がしました。
振り返り	6	自分の専門についてもっと深く考えることができてよかった。そして、今、何をすべきかも分かった。
覚えやすい	3	単語を連続して考え、単語もおぼえやすかったです。今もその時書いた単語が頭の中に入っています。
役に立つ	7	自分自身に近い日本語を増やす機会として本当に役に立った。/自分の専門用語の学習にとっても役立つ。
方法の評価	13	これからこんな言葉は自分の地図を作って勉強できると分かった。 前にこんな勉強方法はやったことがないのでいい経験になりました。
時間不足	13	時間が足りなくて、すばらしい図を作れなかったからちょっと残念でした。
大変	6	自分の専門がすごく広範囲で、大変でした。
難しい	3	言葉と言葉の関連性を考えながら地図を作成したところが非常に難しかったです。
正誤の確認ができない	3	正しい、実際に使われている言葉かどうか分かりません。
問題の指摘・助言	7	地図を作ったら混乱する可能性がある。/あまり有効ではないと思う。 役に立たなかった。よく自分が知っている言葉を連想しやすいから、実際に勉強した言葉は少なかった。 色々な人と話し合ったらもっといいアイデアが出ると思います。

6. まとめと今後の課題

本実践研究では、自分に必要なものを覚えない、という学習者の声に応えるために、学習者自らが必要な語彙を選択する漢字学習の実践として、概念地図を用いた学習を試みた。

活動後のアンケートの結果から、多くの学習者がこの活動によって各自の語彙を増やし、自分の専門に関する知識を整理していることがわかる。また、概念地図を作成することが、専門分野について考える機会となり、そのことにより、今自分に何が不足し、何をすべきかに気づく機会になっていることもうかがえる。

問題としては時間不足が最も多かった。連想で既知語を地図にするだけでなく、新しい語を学ぶためにも、準備の時間も含めて次回からは学習時間を十分にとる必要があるであろう。また、漢字クラスにはさまざまな学部、大学院から学生が集まってくるので、学習者の作成したものについて、専門の知識がない教師には学習者の間違いを指摘できない可能性があるという問題もある。しかし、そのことも含めて、学習者が自律的に学習していく姿勢を身につけられることも重要である。さらに、地図という形ではなく、別のまとめ方についても学習者自らがそれぞれにあった方法を見出していくことも期待したい。

今後この活動の発展として、作成した概念地図を用いて、小論文を書いてみることを行い、学習した語が文章中で適切に用いられるようにしていく作業を行ってきたい。

<学習者の作成した各専門分野の概念地図>

